

2004年度（第6回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

総 評

高 橋 友 子

女性学インスティテュートでは、毎年学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」への応募を行なっています。今年度は2点の応募がありましたが、残念ながら受賞にはあたりませんでした。

各々の作品の講評を、受付順に紹介します。

「ファイナル・ファンタジーXに描かれたジェンダー」（栗嶋梨奈さん）は、ゲーム・ソフトの登場人物の造形をジェンダーの視点から解明しようとした意欲的な作品でした。そして、現代社会のジェンダー分析に関する数多くの先行研究を踏襲しながら、それらを分析の指針として活用し、研究対象を多面的に捉えることに成功しているという評価が、審査員のあいだでありました。

けれども、残念なのは、使用された先行研究を批判的に検討するという姿勢が、執筆者の側に見られないために、論文の記述が冗長で、独創性に欠けたものになってしまっている点です。そうなってしまったのは、おそらく執筆者自身が、無意識のうちに受容してしまっているジェンダー・バイアス（ジェンダーに根ざした偏見）に気づいていないからだと思われます。そのために、執筆者はジェンダーに関して自分もっている価値観を問わないまま、結論を導き出すことになったのです。

次に、「女子大生にみる性的被害の実態調査」（生野ゼミ：赤間瞳さん、青木育子さん、武久千夏さん、桂悠子さん、川本有希さん、岩佐麻友子さん、島田晴佳さん、堀田江美さん）についてですが、日常的には語られにくい性的被害の実態について、かなりの時間と労力を費やして調査がなされたことについては、十分に意義のあることとして評価する意見が、審査員のあいだで多くありました。

けれども、調査の内容に比べると、それらの分析が質的にも量的にも乏しく、

また分析の結果も特に新しい知見を含むものではなく、月並みな結論になっている点、性的被害に対する予防・対処策が、たとえば「露出度の高い服はさけるべき」という、かならずしも正しいとはいえない自己防衛の範囲に留まっているという点、加害者である男性の側の問題が不問に付されている点などが、受賞に至らなかった理由として挙げられます。

このように、懸賞論文として今年度に応募された作品に共通してうかがえることは、分析者の側が、自らが身につけてしまっているジェンダー・バイアスにあまり気づいていないことです。このことは、女性学やジェンダー論に関するテーマを選択し、分析していく過程で、分析者が最も気をつけなければならない重要な点であるといえるでしょう。なぜならそれは、研究対象が逆に、分析者自身もっている価値観の中に潜在的に内在するジェンダー・バイアスを分析者に発見させる機会を与え、分析者に自分の価値観をもう一度検証し、客観化することを余儀なくさせるからです。換言すると、女性学やジェンダー論のような研究は、人権教育に関わる他のジャンルの研究と同様に、知らず知らずのうちに鵜呑みにしてしまっている自らの偏見に分析者自身が気づき、これから脱皮して真摯な姿勢で研究対象と対峙しないと、説得力のある研究にならないという性格をもっているからです。つまり、自分自身の価値観を一度疑ってみることが、女性学やジェンダー論の研究の出発点となっているのです。

以上のように、今年度は残念なことに懸賞論文の受賞作品が出ませんでした。女性学インスティテュートは決して受賞の門戸を狭くしているわけではありません。女性学やジェンダー論に関するテーマで論文を書きたい方は、ぜひ積極的に応募してください。また、質の良い研究をめざすなら、自分が所属するゼミの先生や、女性学・ジェンダー論を授業で担当している先生に、ぜひアドヴァイスを求めてみるのが効果的でしょう。